

大学文書館へ 行こう

第14回 「クラークの子孫がやってきた」

北海道大学大学文書館 井上 高聡



資料を閲覧するクラークのご子孫
(左の4人、2023年1月9日)

クラークの孫の孫

一月九日、札幌農学校開校時の
教頭、W・S・クラークのご子孫、
ブラッドフォード・H・シーウエル
さん、ご夫人エリザベス・A・グ
ロスマンさん、ご子息ベンジャミ
ンさん、ご息女エラナさんが来学
されました。ブラッドフォードさ
んは、W・S・クラークの玄孫(孫
の孫)に当たり、また、戦前に北
大予科の英語教師を務め、戦後の
クラーク会館開館の際に来日した
クラーク二世の孫でもあります。
ご一家は総長と面会された後、大
学文書館、総合博物館、第二農場
を見学されました。大学文書館で
は、クラークに関する資料をご覧
いただきました。

“Boys, be ambitious”の初出

ご覧いただいた資料には、クラ
ークの言葉“Boys, be ambitious”
に関する資料も含まれます。例えば、
別れの当日、農学校生がクラーク
を島松まで見送ったことを記録し
た学校日誌です。しかし、この言
葉をクラークが言ったと記した札
幌農学校の正式な記録はありません。
実際にクラークを見送った札
幌農学校第一期生が語り継ぎ、現
在に伝わりました。

す。安東は、当時
札幌にいた第一期
生からの聞き書き
を基に執筆してい
ます。「学生一同鞍
馬十数匹を連ね彼
を送りて島松に至
り、此所にて昼飯
を喫したり。一同
別を惜みて泣きぬ。
暫くにして彼悠悠
として再び馬に跨り、学生を顧
みて叫んで曰く「小供等よ、此老
人の如く大望にあれ」(Boys, be
ambitious like this old man.)
と、一鞭を加へ塵埃を蹴て去り
ぬ。」(「蕙林」第十三号、一八九四
年十一月)



安東義高(1899年、大学文書館蔵)

連の指摘、ただの別れの言葉と見
るもの、珍説・迷論もあります。

市井の親爺さんの解釈

札幌農学校第十三期生松村松
年が面白い回想を残しています。
学生時代の松村が悪友たちと悪
戯をし、迷惑を掛けた市井の親
爺さんの家へ、菓子折を持って謝
罪に訪れます。親爺さんは松村
たちに向かって、「お前さん等の
農学校は、昔のことで、お前たち
ア知らないだらうが、偉い西洋の
先生があてな……な
んと言ったつげかな
あ、そのボーイ……
はつきりと思ひ出せ
ねえがヨ、……つま
り小さいことにクヨ
クヨすんな、もつと
でつけえ事に眼を向
ける、といった意味

のことを言ったってぢあねえか、
それをお前たちア忘れたわけぢあ
あるまい。」と発破を掛けたそう
です。親爺さんの解釈は、実に
直截で、クラークの真意を鷲掴
みにしたような迫力があります。
松村は、「Boys, be ambitious」
は、在学八ヶ年、知らぬどころか
何度聞かされたか知れない「しか
しこの時間いたほど、嬉しく、感
激的に思へたことはなかったと記
しています(松村松年「大志を抱
け」物語、『文藝春秋』一九五六年
二月)。

松村が札幌農学校に在学した
のは一八八八〜九五年です。回想
の内容は、安東幾三郎がクラ
ーク伝記を掲載した時期か、それ
以前に当たります。このころに
は、クラークの言葉は農学校で既
に定着し、札幌の市井の親爺さ
んまでも知っていた、ということ
を示す興味深い資料です。

簡潔なこの言葉には、様々な
人々が自身の思い入れや理想、思
惑を読み込んできました。キリス
ト教信仰に寄せた解釈、日本国憲
法へと連なるリベラル思想との関



安東幾三郎「ウイリヤム、クラーク」
(『蕙林』第13号)